

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都荒川区南千住 8 - 2 - 1
園名	荒川区立南千住第二幼稚園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

本園の地域及び園庭は自然が充実し、植栽も豊かである。一方で園児の立ち入らない場所や使用していない箇所がある。工夫を図り、より一層自然への興味関心を高めたい。

2. 活動スケジュール

1. 1月28日

○園庭の土を採取し、それを用いて遊びながら感じたことや面白さを共有する。

- ・土の変化を楽しみ、様々な道具で遊びながら土の色や感触の違いに気付く。

2. 1月29日

○採集したものや遊んだものをじっくりみて、新しい気付きを得る。

- ・じっくり見ることで新しい発見を楽しみ、さらに土へ関わろうとする。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【素材・道具】（＊は2日目だけの準備物）

- ・土 ・カップ(様々な大きさ) ・シャベル ・水を入れる容器(様々な大きさで)
- ・採集したものを集めるための大判のトレイ ・泥を運ぶトレイ ・白の画用紙大
- ・筆 ・こて ・虫眼鏡 ＊はけ ＊へら

【環境の設定】

- ・築山から土を採取し、少しずつ水を加えながら変化を楽しめるように、大きなトレイを外テーブルに配置する。また、カップに水を入れて傍に置いておく。
- ・触れたり、塗ったり、思い思いのペースで土に触れることを楽しめるように道具を用意する。翌日は、変容を見たり触ったり、自分の思いで関われるようにする。

4．探究活動の実践

< 活動の内容 >

- 年少組「幼稚園にある土をいつもと違う道具で遊んでみよう」
 - ・乾いた土に水を混ぜ、練ったり混ぜたり塗りたいくったりして様々な遊び方から、面白さを発見する。
- 年少組「翌日の変化をじっくり見てみよう」
 - ・前日遊んだ場がどうなっているかじっくり見たり、触ってみたり、気付きを楽しみ、教師や友達と共有したりする。

< 活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり

1，1月28日（水）

○築山から土を運ぶ

- カチカチに固まっている築山の崩れているところから「ここからとれるよ！」「いっぱい取ろう！」などと会話しながらいつものようにバケツに土を集めている。
- ・「大きな白いトレイに集めた土を出してみよう！」と教師が問いかける。
- いつもはバケツの中に水を入れて混ぜたりするところ今日は、土を広げ手で混ぜてみる。
- 「さらさら」「かたまっている！」「かたまりをぎゅっ、てやるとばらばらになる！」などと、乾いた土の感触を楽しんでいる。

○水を入れてみよう！

- ・さらさらの土に少しずつ水をかけてみる。
- 「すぐ水がなくなっちゃった」「お山の上からお水が流れた！」と水が吸われる様子や流れる様子を見ている。
- ・教師がこねてみると、多くの子がまねをしてこね始める。
- 「こねこね」「ぐにゃぐにゃになった！」「パン屋さんみたい！」「ベチョベチョとさらさらを混ぜよう！」「もっとお水！」「茶色になった！白いのをかけよう！茶色になった！」などと少しずつ変わっていく様子を楽しみ、気付いたことを言葉にして教師に伝えたい子と、じっくりと土に向かって触れ続ける子がいる。
- 「パン屋さん」と言ってこねていた子達は、「丸にしよう！」と固め出した子の様子を見て「なんか粘土みたいじゃない？」とさらさらの状態で粘土に変わったことに気付いた。
- 「ぷにぷに」「むにゅむにゅー！」と言いながら楽しむ。
- 別のパネルの上で遊んでいた子達は、水をどんどん入れ、一気にとろみのある泥水のようになっていた。
- 「チョコレートみたい」「もっと水！」「びちょびちょ」「茶色くなった」などと気付いたことを言葉にしている。



→手で混ぜていたことで、時にすじができる様子を見て絵が描けることに気づき、指で描いた絵を教師に見せてくる。

・「チョコレートで絵が描けるの！？じゃあこれも使ってみる？」

と、絵の具の筆と新しいパネルを出して立てかけてみる。

→数名が筆を持ち、泥水を付けてパネルに描き始める。

・大きな白い画面（段ボールに白い全紙を貼ったもの）を出す。

→筆や刷毛を持って描き「こっちはいっぱい描けるけれど、こっちはすぐに描けなくなっちゃう」と、水の量の少ない土と泥水の違いに気付く。

・教師が手で土を貼り付けてみると、一緒にやってみようとしたり、手に土を持って白い画面に投げつけて散らばったりくっついたりする様子も楽しんだりしていた。

→粘土のように混ぜていた子達が、ほどよい粘土くらいの堅さに出来た子、もう少し柔らかい子など様々になってきた。

・「ペンキ屋さんにしてみる？」と別の場所を提供し、こてを出して壁に塗ってみせる。

→「塗り塗りしよう！」「工事中です！」などと言って塗りたくり始める。「ごしごし！」「チョコレート」などと友達と一緒に様々な擬音を使って楽しさや感触を伝えたり、鼻歌のように歌ったりしながら楽しさを共有している。

→トレイに泥を入れて、そこからこてで取って塗っていく中で、そのトレイの上で指でなぞって絵を描いたり、トレイの泥にスタンプのようにこてを押し当てて粘着感を楽しんだりする様子もあった。

→長い時間友達と一緒に壁にこてで塗りたくる遊びをして行く中で、今行っている『3匹こぶた』の劇のイメージが膨らみ「チョコレートのおうちが出来そうだね」「時々なめたら美味しいお家だね」などという会話が膨らんでいた。

→汚れるのが苦手と普段あまり泥遊びをしない女兒が、この塗りたくりがとても楽しかったようで長い時間楽しみ、「明日はどうなっているかな」と何度も友達に伝えていた。

・降園時に、『今日のどろんこ遊びで楽しかったこと』と振り返ってみる。

→「プニプニで面白かった」「とろとろになった！」「チョコレートのおうち作って楽しかった」などと、擬音で表現し、イメージをもって遊んだ楽しさなどが出ていた。



2, 1月29日(木)

○チョコレートのおうちはどうなったかな？見てみよう！

→塗りたくった壁を見に行くと「白くなった！」

「固まっている！」「カチカチになっている」

と目を丸くして触っている。

・『カチカチの取れるかな？』と教師がつぶやく。

→さわり方が変わりこすったり剥がそうとしたりしている様子もあった。

・使用していたこてもそのままにしておいたのでそれを見える。

→「こっちもカチカチになっている」「あ、取れた！カチカチがピカピカになった！」「昨日はこんな色じゃなかったのにね。なんでだろう」

・筆や刷毛を出してみる。

→それでこすってみるが変化がない。「お水ちょうだい！」と水を塗り始めた。「白が茶色になった」「色使っていないのにお水だけで茶色になった！」とみんなで水を塗って、元に戻そうとしていた。

・教師は幼児の気付きに共感しながら、どのように遊んだり試したりするか見守った。



○粘土はどうなっている？

・大きなプレートの上の粘土遊びをした泥を持ってきてみる。

→「カチカチになっちゃった！」「かたっ！」「めっちゃ硬い！水をつけてみよう」などと、昨日からの変化を何度も「硬い！」と言葉に出しながら触る。水のところに持っていき、また柔らかくして粘土にしようとする子もいれば、かたまりを崩して遊ぶ子もいた。

・すりこぎの棒、こて、シャベルなどの道具を置いておく。

→固まりをつぶそうと、それぞれ様々な道具で試していたが、こてで勢いよくバン！とすると一気に粉々になることが面白くなり、一人の男児がずっとやっている。「いっぱいできた！さらさら」等と言っている。そこに見に来た男児も真似をしてや



りはじめ、2人でずつかたまりを崩して遊んでいた。すりこぎ棒はもっと細くなることや、細かくなってサラサラ具合が気持ち良いのかずっと触って「さらさら」押して「ぺっちゃんこー」などと言って長いこと楽しむ。また、つぶつぶのものをすりこぎで綿棒のようにごろごろすると、とても細くなることにも気付いて「つぶつぶがなくなるよ」と言いながらやっていた。

→トレイが大きく、自分の場所や自分の砂を確保できていることで、同じ場にながら違う遊びも展開されたり、比較したり競ったりして楽しんでいた。

→この遊びはとても長い時間続き、粉のような土を山にしたり、さらにかたまりを見つけてきてもっと粉を増やしたり、こてでペタペタと固めたり、様々な変化や遊び方を楽しんでいた。

○チョコレートの家→白くなってカチカチ→水を塗ったらまたチョコレート

→どんどん水を塗っていき、茶色への変化を楽しみつつ、しばらくすると「あれ？また白くなっちゃた！もっとお水！」とその場で乾いていく様子にも気付いていた。また、カップに水を入れて筆で塗っていく中で、「あれ？水が茶色になっちゃった...なんで？お水だったのに」などと、筆についた泥からの変化も不思議がっていた。

→チョコレートに戻したいという思いから水を塗り広げ、昨日よりも広い範囲をチョコレートにしようと、長い時間楽しんでいた。

3 , その後

→一週間ほどすべての遊びが続き、その中で、様々なやり方を試したり、また新しい気付きがあったりしながら続いている。また、チョコレートのおうちも「お掃除屋さんにしよう！」とブラシをもってごしごししながら「ピカピカになった！チョコレートが今度はピカピカ！」と言って、お掃除遊びも楽しんでいた。

5 . 振り返り

< 振り返りによって得た先生の気づき >

- ・土の素材での様々な遊びの中で、幼児の気付きの中からたくさんの色についての発見が見られ、茶色い・白くなった・こっちと色が違う、などと色に着目されているのが面白かった。
- ・土と水と少しの道具で、幼児なりに遊び方を見つけたり、自分の面白さを追究したりして遊んでいた。一人ひとりが自分のペースで泥との関わりを楽しめたことで、様々な発見や面白い遊び方が生まれていた。教師はいろいろ提供しすぎず、幼児の気付きを拾ったり、言葉にして代弁したり、周りにも広めたり、何よりも楽しさを十分に共有する事が、探究に向かう気持ちを支えられるのではないか。それには、幼児が『もの』とじっくり向き合える時間や、ゆったりした空間もとても大事である。
- ・大きな白いトレイを設置したことで、自分の場所や自分の砂を確保できそれぞれが自分のペースで砂と関わる事ができたのもとてもよかった。また、白いトレイ、という飾りのない素材も『もの』としっかりと向き合える環境となったのかもしれない。

- ・道具も幼児なりに使い方を工夫しており、すりこぎを転がして砂を細かくする、こてで細かい砂を運ぶなど、教師が想定しない使いかたも見られた。道具の使い方も幼児なりに試したり気付いたり工夫したりできる素材でもあることもわかった。
- ・道具や素材の出し方やタイミングがとても大事であると感じた。今回の活動の中では、教師が絶妙なタイミングで道具などをそっと出しており、初めから設置しておくのではなく幼児の様子を見ながら、遊びや興味の広がりと共に出していくことで、少しずつ展開されていくということがわかった。
- ・活動内容などを職員で検討する際に、予想される展開やそれに伴って必要な道具などを、教師みんなで考え、様々な展開に対応できる道具や素材を準備しておく、というのによいのではないかという意見も出た。
- ・ひとつのことをじっくりと長く遊ぶ中で、自分の中で気付きや驚きがたくさん生まれ、心の中で自分なりの問いをたくさん生み出して、同じことを繰り返しているようであった。年少で探究とは難しいと思っていたが、年少なりの探究は言葉にならないがそれぞれ心の中にはあるのだと気付いた。
- ・年長児の場合、気付きなどをすべて言葉で伝え合うだろうが、年少児は擬音や歌などで気付きを知らせようとしたり、楽しさを共有したりして遊び進んでいく様子が面白いと感じた。
- ・年少児にとって『探究』とは、じっくりと『もの』に向かって遊び込む中で『不思議・面白い』をたくさん感じることはないのではないかと感じた。まだ、「なぜ？ どうして？」等の問いまでいかない年少児も、じっくりと自分のペースでものに向かって遊ぶ中で、様々なことを感じ取っている。それを言葉に表すのは難しいが、擬音を使って変化などを表現したり、表情で驚きや喜びを表したりしている。これを教師が見取り、読み取ったことを言葉にして「○○だったんだね」「面白いね、どうして○○なんだろう？」などと、感じたことや問いを引き出して行くことが、この先の探究に繋がっていくのではないかと分かった。
- ・じっくりと『もの』と向き合う年少児の姿を、じっくりと見ていくと、言葉にしていない様々な気付きや驚きや発見など、表情やつぶやきや行動からたくさん読み取ることができる。年少児の活動から「探究している姿」を見取ることが、とても面白いと感じた。
- ・遊びや活動の中で、どんなことを探究させたいかという目的をもちすぎず、想定はしておくが想定外のことが出てきたときに「おもしろい！」と拾える余白を教師がもっていること、幼児の遊び方やペースを見ながら、幼児の探究したいことを見取って支えることが重要であると気付いた。